

三重県名張市方言における 身体感覚を表すオノマトペ

佐藤虎男

はじめに

1. 調査対象地 名張市は、旧伊賀の国の内、伊賀上野市の南に位置する。近畿日本鉄道の大阪線によって、大阪・名古屋・鳥羽などとの交通が開け、また八木を経て奈良・京都ともつながっている。元来伊賀盆地は農業地帯であるが、近時は大阪への通勤通学者もますます多く、大阪のベッドタウン化しつつある。現在、戸数21318戸、人口73511人である。
2. 調査年月日 平成3年12月7日
3. 話者 井作千代 (はく ぢ) 氏。昭和3.11.1生 (63歳)。外住歴皆無。
4. 調査者・調査場所 佐藤虎男。調査は旧市街の豊後町にある井作氏宅で行った。
5. 調査方法・調査時の様子 所与のテキストを中心にした質問調査。話者は多年教職にあった人で、言語感覚優れ、慎重丁寧に答えられた。調査者との共同思考にも的確に対応された。ただ、使用者層や品位や用法について、一語洩らさずの確認はしていない。特記してないのは、話者の年層においては普通・並みの意であると見ていただいて、ほぼ間違いはないであろう。

<凡例> 抑揚の記号は、〔 〕の語には付けない。○印の例文や*印の中の語にだけ付ける。「 」（鍵式）により、音声的な上がり下がりを表記する。

I. 全身の感覚

1-1. 快不快

- [サッパリ] ○「アー サッ「パリ シ「タ ワ。 *アクセントは、サッ「パ「リとも。
*なお、別に「全然」の意で“サッ「パ「リ「ワ「ヤヤ (だめだ)” のようにも使う。
- [スッキリ] ○オカゲデ 「キ「ブンガ スッ「キ「リシタ ワ。 *キブンガスッキ
リ で、サッパリの意味になる。スッキリだけでは身体感覚とはいえないであろう。
- [スーッ] ○ヒ「サシブリニ「 ソトノ 「ク「ーキ 「ス「ー「タラ 「スー「ッ「ト
「シ「タ ワ。 「セ「ー「セ「スルとも。
- [グッショリ] ○ア「セ「 グッ「ショ「リヤ。 *ただし身体感覚からはやや外れる。
なお、～スルという形はない。
- [クタクタ] ○「モー「 キョ「ー「ワ クタク「タ「ヤ ワ。 極度の疲労感をいう。

なお、～スルという形はない。

〔グツタリ〕○疲労の極に達した虚脱状態をいう。グツ「タ」リヤ。また～スルとも。

〔コチコチ〕○「ナ」ガイコト 「カラダ」 コチコチ「ヤ」 ワ。運動不足などで体が硬直したようなのをいう。

〔ゾーット〕○ゾー「ッ」トシテ 「トリハダ」 タッタ ワ。＊寒い時も怖い時も言う。なお、鳥肌たつことを「ケ」ノネタ「ツ、さらに古くはゾ「ゾ」ゲタツと言う

1-2. 寒さ

〔ガタガタ〕○サ「ム」テ ガ「タ」ガタ フルエル。＊アクセントは「ガ」タガタとも。

〔ブルブル〕○「ブルブル フルエル。＊ガタガタの方が激しい感じ。

〔ゾクゾク〕＊次のゾーゾースルに比べると、新しい感じ。

〔ゾーゾー〕＊共通語の「ゾ」クゾクスルに相当。「ゾ」ーゾーは昔からの言い方。必ず頭にセナカを付けて言う。若い人に対しては「ゾ」クゾクスルと言うが、土地の人と話す時は、今でもこのゾーゾースルを使う。

〔スースースル〕＊隙間風で寒い時に言う。○「コノヘ」ヤ 「ス」ースーシテ 「サ」ムイ 「ナ」ー。この点、ゾーゾースルとはやや異なる。

1-3. 熱さ

〔ホカホカ〕○「カラダ」 ホ「カ」ホカシ「テキ」タ。＊酒を飲んだりした時。

〔ボカボカ〕○「ボ」カボカ 「アツカ」イ。＊日向ぼっこなどしている時。

＊カッカは、立腹して頭に血が上る状態をさす。卵酒を飲んだ時には言わないだろう

II. 皮膚の感覚

〔ヒリヒリ〕○セナカが 「ヒ」リヒリスル。 ＊ヒ「リ」ヒリの方が地のことば。

〔ベタベタ〕○ア「セ」デ セナカが ベタベ「タ」ヤ。 ＊ア「セ」ビツ「ショ」リは汗の出方を表現し、ベタベタはまさしく皮膚感覚を表す。ただし、「ベ」タベタクツ「ツ」ク ナ。という時のベタベタは身体感覚のものではない。

〔ベターット〕上と同じ意味だが、うす気味わるい感じが一層強い。

〔ムズムズ〕＊この語も使うが、背中に何か入ってという場合は、形容詞のイタガイイ、あるいはコソバイをいうのが、土地人の普通。カ「イ」テ (痒くて) ム「ズ」ムズスル。など、むずがゆい時に言う。

〔カサカサ〕○テガ「ア」レテ カ「サカサ」ヤ。 ＊スルがついた時はカ「サ」カサ。

〔ガサガサ〕＊これは、皮膚感覚というよりは擬音語である。

〔ジャリジャリ〕○「ヒゲガ」 「ジャ」リジャリシテ 「キモチワ」ルイ 「ナ」ー。

〔ザラザラ〕○上と同じ場合に使うことがある。

〔ツルツル〕○(温泉につかって) ハダガ ツ「ル」ツルシタ。 ＊ヤがつくと、ツルツ「ル」ヤ となる。「ツ」ルツルスルは共通語アクセント。

〔スベスベ〕＊ツルツルと同じ場合に使う。ただ、スベスベは快感と結びつきやすく、ツ

ルツルの方はマイナスイメージが強い感じ。

〔サラサラ〕○ハダ「ザ」ワリガ 「サララ」ト シトル。のように使う。皮膚感覚というよりは、触れる物の属性を言い表すことに重点がある。

〔ヒリヒリ〕○擦り傷・日焼け・火傷などの場合。皮膚の表面の感覚。

〔チクチク〕○指に切り傷したときなど。

〔ジクジク〕○切り傷とか「おでき」（腫瘍）などの場合。

〔ズキズキ〕○切り傷・腫瘍・頭痛・打撲などの場合に。なお、ジクジクとの間で痛みの程度の差を言うのは困難。ただズキズキの方が、幾分内部的できついように思う。

〔ズキンズキン〕○同上。上と痛みの程度はほとんど変わらないが、頻度においてはズキズキの方が多用される。なお、「ボトボト」ということは当地にはない。

〔ザクザク〕○切り傷やおできなどの、脈拍に合わせたような深い痛みを「ザ」クザクスル という。

〔ザックザック〕○上とほとんど同じ。痛みの程度はやや強。

Ⅲ. 頭部の感覚

3-1 頭

〔ガンガン〕○熱があって頭が「ガ」ンガンスル。＊ズキズキより痛みの程度が強い。

〔クラクラ〕○熱で「ア」タマ ク「ラ」クラスル。

〔ズキズキ〕○二日酔いで頭がズ「キ」ズキスル。＊ズ「キ」ンズキンスル とも。

3-2 顔面

〔カッカ〕○恥ずかしくて「カオガ」ホ「テ」ッタ。＊「カッ」カシテキタ。とも。また「マッ」カニ ナッタ。とも。なお、暑い部屋の中の場合でも、「カオガ」ホ「テ」ッタ とか「カッ」カスル ともいう。

〔ボート〕○部屋があつて「アタ」マガ ボ「ー」ッ「ト」 ナッタ ワ。
＊ボカー「ン」ト スル とも。

3-3 目

〔チカチカ〕○テレビ見過ぎて メー「ガ」チ「カ」チカスル。

＊身体感覚以外にも、蛍光灯の光りが安定しないのを、「チ」カチカスルと言う。

〔ショボショボ〕○ミエヌ「ク」テ メ「ー」ショ「ボ」ショボスル。＊これは、煙に限らず、長い物やテレビの見過ぎで目が疲れた時によく言う。煙で目が痛い時は、むしろ メーガ「イ」タイ とか 煙が「メー」ニ「シ」ミタ とか言う。

〔シボシボ〕上と同じ使い方であるが、こちらの方が古い語である。

〔コロコロ〕○目にごみが入って メーガ コ「ロ」コロスル。＊ゴロゴロは言わない。

3-4 耳

〔ツーント〕○耳が「ツ」ン「ト」スル。＊トンネルを抜け出た時も。

〔ジーント〕○耳が「ジ」ン「ト」シトル。＊悲しい時も「ジーン」トキタなどと言う。

〔キーント〕○耳が マダ 「キーン」ト 「ナット」ル。 *かなり擬音語に近い。
〔ジクジク〕 *耳の中が腫れて膿汁が出た時など。

3-5 鼻

〔モズモズ〕○クシャミが出そうで モ「ズ」モズスル。 *ム「ズ」ムズは新しい。

*風邪をひいて鼻が、という時も、モズモズを使う。

〔グジュグジュ〕○風邪ひいて「ハナ」 グ「ジュ」グジュシテン ネン。

〔ツーン〕○山葵が効きすぎて「ハナニ」 ツー「ン」トキタ。 *目にツーン「ン」トも。

3-6 口

〔ネバネバ〕○「クチガ」 ネ「バ」ネバスル。 *ネチャネチャよりもこれを使う。

〔ネバット〕○ナン「ヤ」ラ 「クチガ」 ネ「バ」ットスル もよく使う。

*梅干しを丸ごと食べた時の感じの場合は、「クチカラ ミズガ ワイテ」クル。
と言い、オノマトベによらない。

〔ネットリ〕○「クチノ」 ナカガ ネット「ト」リスル。 これもよく使う。

〔イグイグ〕 *ひどく甘かったり辛かったりなどの刺激性の強い時の感じを、イ「グ」イグスルという。形容詞〔イグイ〕もある。梅干しの時にイグイグスルは言わない。

なお、「イガラッポ」イ という形容詞は、このオノマトベが元になっていよう。

〔イーット〕○「クチガ イー」ット ナル。は、強烈な刺激性の味によってイグイグスルことを言う。

〔ガタガタ〕 *多用。ガ「チ」ガチ も使うように思うが、カ「チ」カチ ユーも言い、この方が寒さが強い。

〔チクチク〕○虫歯がひどく、「ハ」ガ 「チ」クチク 「イ」タイ。 *小刻みな痛み。

〔ズキズキ〕○虫歯がひどく、「ハ」ガ ズ「キ」ズキ 「イ」タイ。

〔ズキンズキン〕○虫歯がひどく、「ハ」ガ ズ「キ」ンズキン 「イ」タイ。

*虫歯の痛みの程度は、チクチク・ズキズキ・ズキンズキンの順で強くなる。

〔ヒリヒリ〕○辛いカレーを食べて「シ」タガ ヒ「リ」ヒリスル。

〔ビリビリ〕○辛いカレーを食べて「シ」タガ ビ「リ」ピリスル。 *痛みの程度大。

3-7 喉

〔カラカラ〕○ノド「ガ」 「カワ」イテ カラカ「ラ」ヤ。 ~スルとは言えない。

〔ガラガラ〕○ノドガ 「ガ」ラガラスル。風邪などの折り声がかすれて出にくい感じ。

〔イグイグ〕○筍を食べて喉が イ「グ」イグスル。 *形容詞イグイによる表現もある。

*空気が悪くて イグイグスル とは言わない。

〔ゼーゼー〕○息苦しくて ノゾ「ガ」 「ゼ」ーゼー ユー。 風邪や喘息の時など。

〔ヒューヒュー〕○息苦しくて ノゾガ 「ヒュ」ーヒュー ユー。 *この方が病的。

IV. 胴体の感覚

4-1 肩

*カ「タ」ツンデ ア「タ」ママデ 「イ」タイ ネン。 または ア「タ」マ
「ホー」ト 「スン」 ネン。 と言ひ、コリコリは言わない。

4-2 胸

[ドキドキ] ○「ハ」シツテワ アト 「ム」ネ ド「キ」ドキスル。

*このドキドキは、「ビックリ」シ「テ」 「ム」ネ ～ のようにも使う。その場合
にドキンドキンやドッキンドッキンはあまり言わない。

トクントクスル もあまり言わない。

[ドクドク] ○胸が痛い時 「ム」ネ ド「ク」ドクスル と言う。

[キューツト] ○胸の痛みにも、悲しい時にも 「キューツ」ト シメツケラレルを言う

[ムカムカ] ○悪い物を食べたりした時、嘔吐しそうな時 「ム」カムカスル。

4-3 腹

[ベコベコ] ○空腹感をいう。ベコベ「コ」ヤ。ハラベ「コ」とも。～スルは言えない。

[グーグー] ○空腹感をいう。「ハ」ラ ヘツテ グ「ー」グー ユー。

*キュルキュル は言わない。

[ボンボン] ○御飯などたくさん食べた時の満腹感をいう。～スルとは言えないで、必ず
ボンボ「ン」ヤ と言う。

[バンバン] ○御飯などたくさん食べた時の満腹感をいう。～スルとは言えないで、必ず
バンバ「ン」ヤ と言う。

[ダブダブ] ○水飲みすぎて ダ「ブ」ダブシテキタ。これが普通の言い方。

[タブタブ] ○水けの物で満腹の時。タ「ブ」タブ ユー。または タブタ「ブ」ヤ。

[タブタブ] ○水けの物で満腹の時。タ「ブ」タブ ユー。または タブタ「ブ」ヤ。

[チャブチャブ] ○同上。 チャ「ブ」チャブ ユー。または チャブチャ「ブ」ヤ。

[タブンタブン] ○同上。 タ「ブ」ンタブン ユー。または タブンタブ「ン」ヤ。

[チャボンチャボン] ○水飲みすぎて走ったら チャボ「ン」チャボン ユー ワ。

[ゴロゴロ] ○下痢して オナカガ 「ゴ」ロゴロ ナル。 ゴ「ロ」ゴロ とも。

*こういう場合に グルグル は言わない。

*なお、下痢状態を オナカ 「ピッピー」ヤ ネン。のように言うが、これは身
体感覚とはいえないであろう。

4-4 胃

[キリキリ] ○オナカ 「シ」クシクスル。 小さな痛み。よく言う。

[ジクジク] ○「イガ」 ジ「ク」ジクスル。 シクシクよりやや強い。

[キリキリ] ○「イガ」 キ「リ」キリスル。 ジクジクよりさらに強い。

4-5 尻

[ムズムズ] ○オ「シ」リ ム「ズ」ムズスル。

[モゾモゾ] ○オ「シ」リ モ「ゾ」モゾスル。これは高齢者が言う。

V. 手足の感覚

[ブルブル] ○ナン「デ」カ テーガ ブ「ル」ブル フルウ ワ。

[ガタガタ] ○上よりも程度が強い場合、ガ「タ」ガタ フルウ ともいう。

[ガクガク] ○歩きすぎて 「ア」シガ ガ「ク」ガクスル。 なお、

*「ア」シガ モツレテ モ「タ」モタシテル。は擬態語で、身体感覚ではない。

[ジンジン] ○「ア」シガ 「ジ」ンジンシテ 「ネラレ」ナング。内部的な痛み。

[ヌルヌル] ○ヌ「ル」ヌルシタ モノガ 「ア」シニ 「ア」タツタ。

[ニュルニュル] ○ヌルヌルよりもさらに嫌らしい感じを言う。

[ビリビリ] ○電気が 「ビリビリ」ッ ト キタ ワ。も身体感覚の一種であろう。

VI. 関節(骨)の感覚

[ボキボキ] ○長く運動不足で、「ホ」ネガ ボ「キ」ボキ 「ナル。 *バキバキは言わない。*寝違えた時は、「クビガマガラン」と言い、グキグキ・ゴキゴキは言わぬ

○まとめ

紙幅の残りが無いので、考察課題として考えたことを列挙して、後考を期する。

1. 語音形態の特色 —これには先人の多様な指摘がある。2拍の反復による4拍語が多いことなどは誰の目にも明らかだが、反復が「現象の持続」を示すと指摘したのは小林英夫「国語象徴音の研究」(「文学」第一卷八号1933年)である。近くは室山敏昭「方言副詞語彙の基礎的研究」(1976 たたら書房)の精緻な語音分析がある。それにならっていくつかの特徴を記述すれば、反復形式の4拍語の、1・2拍の母音の組み合わせでは、/u・u/が抜きんで多く、/e・e/はごく少ないこと、子音では語頭破裂音が多く、特殊拍とラ行音が語頭には立たないことなど。これら語音の種類と、各音の語中での分布と、頻度と、その必然性の問題。
2. アクセントの傾向 —反復形には平板型がなく、起伏型だけである。しかも高音部は必ず1拍だけで、第1拍が高い頭高型と第2拍が高い二高型の二種がある。前者は共通語アクセントで新しい感じがあり、後者が当地の昔からのアクセントである。
3. オノマトベによる表現とこれによらない表現との対比 —前者が個別的・直観的であるのに対して、後者は一般的・概念的・説明的である。オノマトベでなくては表現できない場合と、そうでない場合との別、また両者の表現効果の問題。関連して、身体感覚を表す語彙全体(動詞形容詞名詞なども含む)のなかでのオノマトベの機能負担量を見定めることも、一つの課題になる。たとえば味覚語彙全体のなかでのオノマトベのそれはごく小さいのに、身体語彙とりわけ痛痒語彙のなかでのオノマトベのそれは、上にも見られるとおり、かなり大きいといえる。
4. オノマトベの個人差、年層差、地域差の問題はいずれもきわめて重要である。
5. 調査法の探究 — 語彙項目のリストだけでなく、意義素帰納に向けた話者との共同思考のための調査簿作りが緊要であろう。 (さとうとらお 大阪教育大学)